

巻頭言

明星大学発達支援研究センター センター長 吉川 かおり

明星大学発達支援研究センターは、発達障害に関する学術調査・研究を推進することにより、発達障害への支援に関する知見を蓄積・発信することをもって、明星大学及び社会に貢献することを目的とする機関である。

そのために、①発達障害に関する学術調査・研究、並びに成果の発信、②発達障害に関する教職員に対する研修等の啓発活動、③高等教育機関に在籍する発達障害のある学生に対する支援方法の研究開発等を行っており、本紀要は①に該当する。

2020年は、未曾有の新型コロナ感染症禍に見舞われ、大学における授業のあり方も大きな変更を余儀なくされた。そのような中であって、2019年度の実施ではあるがフィラデルフィア・オステオパシー医科大学のジョージ・マクロスキー先生による講演録『実行機能に困難のある児童生徒のアセスメントと介入—認知神経心理学に基づく「子どもの学習・行動に変化を促す技法論」—』と、その内容に関連して「実行機能に注目した支援・介入」という特集を組むことができ、また、自立支援およびコーチングに関する論文が掲載されることを、新任センター長としてとても心強く、また嬉しく思う次第である。大変お忙しい中に、ご寄稿また査読の労を取っていただいた関係各位に心から感謝申し上げたい。

さて、皆様ご存じのように、コロナ禍で対面授業の実施が難しくなりオンラインへの切り替えが進む中で、発達障害のある学生たちのみならず彼らが受講している科目の担当教員も様々な課題に直面した。例えば、スケジュール管理やメールでのやりとり（時にはメールの設定そのもの）、グループワークへの参加等に困難がある場合、それらへの支援もまたオンラインで提供せざるを得ないという、コミュニケーションツールの限界も加わっての多重困難が生じた。この1年は、社会システムが変われば社会的障壁の現れ方も変化するということを痛感した年でもあった。

2014年度にオープン、研究活動を始動した2015年度から数えれば当センターも丸6年になる。センター設立の経緯の中で、当面の組織研究テーマとして設定されたインクルーシブ教育・ディスレクシア・自立支援の3つの柱についても、さらなる時代の変化を受けた展開を考えていく必要があるし、成果の還元方法についても、オンラインでの経験の蓄積を踏まえた再構築が求められよう。

学部学科を越えた全学的な研究組織としての期待を担う発達支援研究センターが、学内外の諸氏および諸活動に対して一層の貢献ができるよう発展していくために、関係者一同で知恵を出し合い協働しながらセンター運営に臨みたいと思うのである。